赤とんぼとステーキ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤とんぼとステーキ

【Ｎコード】
Ｎ１７０３Ｌ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
孫と一緒に見る赤とんぼ。それはかつて食べ物に困っていた時にも見ていた赤とんぼで。郷愁の作品です。

第一章

赤とんぼとステーキ

「夕焼け小焼けの赤とんぼ」
「おわれて見たのは何時の日か」
童謡を聞く。遠い日でのことだった。
周吉は今その童謡を思い出していた。夕暮れの赤い世界の中で。
今は人のすっかり減ったその道を歩いていて。そのうえで横にいる孫の準一郎に言うのだった。太い眉に切れ長の目をした老人である。銀髪を角刈りにしている。
「なあ準ちゃん」
「何、お爺ちゃん」
まだ幼稚園に通っている小さい男の子が応えて来た。見れば太い眉に切れ長の目と彼によく似た顔をしている。その子に対して言うのだった。
「何かあったの？」
「赤とんぼ好きか？」
こう自分の左手で手を引いている孫に対して問うのだった。
「赤とんぼは」
「赤とんどってこれ？」
準一郎はそれを聞いて自分の上に飛んでいるその赤とんぼを見た。二人のいる場所は川の土手の上にある道でそこを二人並んで歩いているのである。
「この飛んでるのよね」
「そうだよ。これだよ」
まさにこれだというのだ。
「これが赤とんぼなんだよ」
「ふうん、何か一杯いるんだね」
「昔から一杯いるんだよ」

それは昔からだというのだ。
「赤とんぼはね」
「一杯いるんだ」
「ここは随分変わったけれど」
今周りには右手に多くの住宅が土手の下から見えていてそれがずっと前まで続いている。後ろには線路がありそれが川を挟んで橋の上にもある。水色のアーチの線路橋だ。
その周りを見ながら。彼は言うのだった。
「赤とんぼは多いままなんだよ」
「そんなに多かったんだ」
「準ちゃんが生まれるずっと前からいたんだよ」
そうだというのである。
「赤とんぼはね」
「その赤とんぼってお爺ちゃんが子供の頃からいたんだ」
「そうだよ。お爺ちゃんが子供の頃はね」
そのことを思い出しながら話すのだった。その時のことをだ。
それはもう戦争が終わって暫く経った頃だ。その時のことだ。
ぼろぼろの服を着た子供の周吉はだ。川のところにいた。そこで幼馴染みの勇作と一緒に釣りをしてそれで話をしていた。
「なあ」
「何だ？」
「御前の父ちゃん戦争から帰ったんだよな」
こう勇作に尋ねるのだった。
「そうだよな」
「ああ、そうだよ」
勇作も彼と同じ様にぼろぼろの服を着ている。二人共丸坊主でまだ幼い顔をしている。勇作は吊り上った目をしていて周吉の眉はこの頃から太かった。
「三日前な」
「よかったな」

「御前の父ちゃんはどうなったんだ？」
「帰って来たけれどまたいなくなった」
こう答える周吉だった。目は釣りをしているその水面を見ている。
「またな」
「どっか行ったのか？」
「しょっちゅう田舎に買出しに出てる」
そうしているというのである。
「それで今いない」
「そうか。買出しか」
それを聞いて頷く勇作だった。
「御前の父ちゃんも大変なんだな」
「ああ、俺達だって今こうして釣って」
「晩飯だからな」
「それで釣れるか？」
「そっちはどうなんだ？」
そんな話もするのだった。
「御前釣れるか？」
「とりあえず」
こう答える周吉だった。

第二章

「二匹釣れたよ」
「俺は四匹な」
「いいな、そんなに釣れるのか」
「俺の家族多いから全然足らねえよ」
しかし勇作はこう彼に返すのだった。
「全然な」
「そうか。御前のところって兄ちゃんや姉ちゃん多いからな」
「一番上の兄ちゃんも九州から帰って来たしな」
「皆生きてたんだな」
「婆ちゃんが死んだよ」
しかしここで勇作は口を尖らせてしまった。
「グラマンにやられてな」
「そういやそうだったな」
「御前のところは誰か死んだか？」
「叔父さんと叔母さんが死んだ」
周吉もまた親戚を失っていたのだ。
「叔父さんはフィリピンで死んで叔母さんは大阪に行った時に空襲で死んだ」
「そうか。御前のところも死んだんだな」
「ああ、それで俺のところに今二人の子供が来てる」
このことも話した。
「美加ちゃんな」
「女の子か」
「それで親父がその娘の分まで飯を手に入れに行ってる」
「大変なんだな」
「だからいないんだよ」
そうした事情があってのことだったのだ。

「家に殆どな」
「皆食い物がないんだな」
「腹一杯食いたいな」
周吉は心からこのことを思った。
「本当にな」
「そうだな。何か色々入れた薄い雑炊じゃなくてな」
「白い飯を腹一杯な」
「食えたらいいな」
「知ってるか？」
周吉は釣りを続けながら勇作に告げた。
「アメリカあるだろ」
「ああ」
「アメリカじゃ誰でも好きなだけステーキやチョコレートが食えるらしいぞ」
このことを話したのである。
「もう本当に何枚でもな」
「ステーキってあれか？」
「ああ、牛の肉を焼いたやつな」
それだというのである。今の様にオーストラリアから輸入肉を好きなだけ手に入れられるわけではない。この時代の牛肉はまさに豊かさの象徴であった。
その牛肉を話に出して。彼は言うのだった。
「分厚いのをもう何枚でもな」
「腹一杯食えるのか」
「信じられないよな」
あらためて勇作に話した。
「そんな国があるなんてな」
「俺達なんてそれに比べたらな」
「そうだよな」
食べるものもなくその食べるものを手に入れる為に釣りをしてい

る。その自分達のことも思わずにはいられなかった。二人共もである。
「それはな」
「負けて何もなくなったんだよな」
そして戦争のこともだ。その何もかもなくなったことをだ。
「何か戦争でなくなるのって食い物だけかな」
「だといいよな」
二人は今度はこのことを言い合った。
「教科書黒く塗るとかな」
「そんなの嫌だよな」
こんな話をしながら釣りをしていた。釣りでは魚がそれなりに手にいった。ザリガニもである。それが終わった時にはもう夕方だった。
「なあ、周ちゃん」
「帰るのか？」
「もういいんじゃないのか？」
勇作はこう周吉に言ってきた。二人のその古いブリキのバケツはもう魚やザリガニで一杯である。とりあえず満足できるだけの量はあった。

第三章

「これだけ釣ったら」
「そうか。いいか」
「いいじゃないか？皆食べられる数はあるだろ」
「そうだな」
その言葉に周吉も頷いた。
「じゃあ勇ちゃん」
「ああ、帰ろう」
こうしてであった。彼等は立って釣り道具を収めて帰ろうとする。
その赤い世界の中で。
周りを見回すとそこには。空に無数の赤とんぼが飛んでいた。
その赤とんぼ達を見て。周吉が言った。
「この連中は腹一杯食ってるのかな」
「そうじゃないのか？」
勇作もその赤とんぼ達を見ながら周吉に答えた。
「だからこれだけ元気に飛んでるんだろ」
「とんぼでも腹一杯食ってるのか」
「俺達も食いたいよな」
「そうだよな」
そしてまたこの話をするのだった。
「食い者を好きなだけな」
「なあ」
勇作はここで周吉に対して言ってきた。そのどれだけいるかわからない自分達の上に飛ぶその赤とんぼ達を見ながら。彼等は飽きることなく空を周っている。
「それでだけれどな」
「それで？」
「そのステーキだよな」

さっき話したそのステーキの話である。
「アメリカの奴等が食ってるそのステーキな」
「それがどうしたんだ？」
「俺、それを何時でも好きなだけ食えるようになりたいな」
こう言うのである。
「いや、俺だけじゃなくてな」
「勇ちゃんだけじゃなくてか？」
「日本の皆がな」
皆だというのだ。
「そのステーキを腹一杯食えるようにしたいよな」
「そうだよな」
その言葉に頷く周吉だった。
「それはな」
「こいつ等だって腹一杯食ってるんだ」
その赤とんぼ達もだというのだ。
「だからな」
「そうだよね、食べられるようになろう」
「だよな」
こんな話をしながら二人で赤とんぼ達を見ていた。赤い空の中で飛んでいる彼等を。
そしてそれから暫く経って。日本は復興してきた。その頃には周吉も成長していて中学校に通っていた。詰襟の彼の後ろには一人の可愛らしいセーラー服の女の子がいた。
土手の上のその道を歩いていた。丁度学校帰りである。彼はその土手のあちこちに石が転がっている道を歩きながら。右手にある家を見ていた。
その彼にだ。後ろにいる女の子が声をかけてきた。
「ねえお兄ちゃん」
「何だよ」
「また野球してたの」

「野球部だからな」
そうだと。その三つ編みの女の子に対して答える。
「それはな」
「そうなの」
「だから当たり前だろ？そういう小枝子だってな」
「私も？」
「あれだろ。美術部だよな」
「ええ」
「絵を描いてたんだろ？」
半ば当たり前のことを尋ねるのだった。
「今日も」
「そうよ」
そしてそうだと答える小枝子だった。三つ編みのその顔はあどけない。黒い目がかなり大きい。
「それはね」
「そうだよな。なあ」
「何？」
「俺高校に行くからな」
そうするというのである。

第四章

「受験するからな」
「そうなの、高校行くの」
「最近高校に行く先輩も多いしな」
次第に高校進学率が増えてきていた。そうした時代であった。
「親父とお袋も高校に行けって言ってるしな」
「それじゃあ中学卒業しても」
「ああ、行くからな」
また行くというのである。
「どっかの高校にな」
「そうなの」
「御前はどうするんだよ」
あらためて小枝子に問うた。
「何処かの高校に行くのか？」
「どうしようかしら」
そう言われても今一つわからない顔をする彼女だった。
「私は」
「親父もお袋も行って欲しいみたいだけれどな」
「叔父さんも叔母さんも？」
「ああ、高校はな」
このことを彼女にも話すのだ。
「行って欲しいって言っていたぜ」
「そうなの」
「御前の成績だったら何処かの高校行けるだろ」
「多分ね」
あまりはっきりしない返事ではあった。だがそれでも言うことは言った。
「それは」

「じゃあ行けばいいさ。何なら同じ高校行くか？」
「同じ高校に？」
「そうだよ。俺は商業高校受けるつもりなんだよ」
そこをだというのだ。
「商業高校だと野球もたっぷりできるしな。ひょっとしたら甲子園だって行けるしな」
「甲子園行きたいの」
「ああ、行きたいな」
こんな話もするのだった。
「やっぱりな。野球やってるからな」
「それじゃあ私は」
小枝子は周吉のそんな話を聞いて述べた。
「その周吉さん甲子園の観客席で応援していいかしら」
「じゃあ同じ高校行くんだな」
「ええ」
その言葉に確かに頷いた。
「そうするわ。一年遅れになるけれどね」
「待ってるからな。それにしてもな」
周吉はここで周りを見た。その周りはどうかというと。
赤い世界であった。夕焼けが真っ赤だ。その赤い世界の中で今日も赤とんぼが舞っていた。
数はとても多い。見える限りそこには赤とんぼ達が舞っている。そんな土手の上の道だった。
その赤とんぼ達を見て。周吉は小夜子にまた言った。
「この道も同じ高校だったら今みたいに歩けるからな」
「今みたいに」
「できたらずっと会ってみたいな」
こうも言うのだった。
「ずっとな」
「ずっとなの」

「俺達ずっと一緒にいたよな」
「ええ」
「御前が俺の家に来てから」
その時からだというのである。
「だからな。これからもな」
「二人でね」
「できたらいないか？」
ここで小夜子の方を振り向いた。その彼女の方をだ。
「ずっと二人でな」
「それも高校に入ったら」
「いたいんだけれどな」
そんな話もこの赤とんぼ達の中でした。そうしてであった。
高校を出て働きだして。彼は今度は勇作と一緒に道を歩いていた。
勇作もまた同じで高校を出て働いていた。その彼が横にいる周吉に対して言うのだ。
「俺今コックやってるよな」
「ああ」
「それでな。独立しようと思ってるんだ」
こう彼に言ってきたのである。

第五章

「ちょっとな」
「独立？」
「ああ、今働いている店から独立しようと思ってるんだ」
そうするというのである。
「まだ先の話だけれどな」
「そうか、独立か」
「今レストランで働いてるだろ」
「あの洋食のか」
「ステーキを焼きたいんだよ」
彼は言った。
「ステーキをな。それで皆がその俺が焼いたステーキを食うのを見たいんだよ」
「御前はどうなんだ？」
「当然俺もさ」
彼自身もだという。
「ガキの頃から思ってたさ、ステーキを腹一杯食いたいってな」
「今は食うものが足りるようになってきたけれどな」
あの何も食べるものがなく釣りをしてまでしてそれを手に入れる時代ではなくなっていた。あの時のことはもう遠い昔になっていた。
「それでもな。やっぱりステーキなんだよ」
「ステーキを贅沢に腹一杯か」
「皆俺のそのステーキを腹一杯食って俺も食ってな」
「そうしたいのか」
「どうだろうな」
ここまで話してだ。あらためて周吉に話を問うのだった。
「独立は」
「いいんじゃないのか？」

彼はそれをいいとした。
「御前がそう思うんならな」
「そうか」
「俺はいいと思うな」
そしてこうも言うのだった。
「それで」
「そうか。じゃあその時が来たらな」
「ステーキハウス。はじめるんだな」
「皆に俺のステーキを食ってもらうんだ」
彼は夢を語っていた。彼のその夢をだ。
「絶対にな」
「応援するからな」
周吉はその勇作に告げた。
「絶対に。成功させろよ」
「ああ、絶対にな」
こんな話をしているとだった。また赤とんぼ達が見えてきた。それに気付いて彼はここでまた勇作に対して声をかけるのであった。
「なあ」
「今度は何だ？」
「御前ともよくここを歩くよな」
そのことを彼に話すのだった。
「子供の頃からな」
「ああ、そうだったな」
「そうだな。ずっとな」
「そのステーキの話も昔したな」
そしてまた言う彼だった。
「子供の頃もな」
「そうだったな。今も昔もな」
「赤とんぼはステーキにはできないからな」
「ははは、これだけ牛がいればな」

勇作はその話を受けて笑った。
「ステーキも安くなるよな」
「ステーキが安くか」
「そんな時代来る訳ないよな」
勇作は笑ってそれは有り得ないとした。
「やっぱりな。それはな」
「ないだろうな」
周吉もそう考えていた。
「肉って高いものだからな」
「滅多に食えるものじゃないからな」
「そうだな。鯨とか魚ばかりでな」
この時代は皆そういうものばかり食べていた。とにかく鯨を食べていたのである。
「肉なんてな。とてもな」
「だからそれを腹一杯な」
「食えるようになりたいんだな」
「ああ、なってやる」
勇作の言葉が強いものになった。
「そして焼いてやるからな」
「それが御前の夢なんだな」
「ああ、そうだ」
まさにその通りだというのだ。

第六章

「やってやるからな」
「御前も夢があるんだな」
周吉はあらためて勇作を見た。見ればその目は実に強い光を放っている。その光を放つ目で言葉を出しているのである。今の彼は。
「それが夢か」
「ああ、周ちゃん」
彼を子供の頃からの仇名で呼んだ。
「頑張るからな、俺はな」
「ああ、応援しているからな」
こう彼に告げてふと彼の顔の向こうを見ると。また赤とんぼ達がいた。
彼等は今日も数え切れないだけ多く飛んでいた。彼等の周りと上をだ。
その赤とんぼの中での言葉だった。今もまた。
そんな話をしていて。今日は孫の準一郎と一緒にいるのだった。今はであった。
「なあ準ちゃん」
「何、お爺ちゃん」
「帰ったらお婆ちゃんと一緒にな」
「お婆ちゃんと？」
「ステーキ食べに行こうか」
こう言うのである。
「ステーキをな」
「ステーキを？」
「勇作おじちゃんのお店でな」
そこで食べるというのである。
「そこでどうだい？」

「うん、じゃあ」
それを聞いてにこりと笑って頷く準一郎だった。
「三人でね」
「お父さんとお母さんは今日は遅いから」
二人は共働きである。それで周吉は妻と二人で彼の面倒を見ているのである。
「三人でね」
「そういえばお爺ちゃんってステーキ好きだよね」
準一郎はこのことを祖父に言ってきた。
「何かあるといつも食べてるよね」
「うん、好きだよ」
孫の問いをにこりと笑って認めた。
「昔からね」
「そうだったんだ、昔からだったんだ」
「小夜子お婆ちゃんは特にそうでもないけれど」
妻の名前も出す。
「それでもね。好きだよ」
「どうしてなの？」
「昔はお肉なんて食べられなかったんだよ」
その昔のことを話すのだった。
「とてもね」
「お肉が？」
「そうだよ。食べられなかったんだよ」
そのことをまた孫に話した。
「とてもね」
「そうだったんだ。お肉が」
「今ではとても安く手に入るけれどね」
今は、である。今はオーストラリアやアメリカから輸入肉が安く手に入る。それで肉の値段もかなり下がったのである。そういう事情があるのだ。

「それでも昔はとても」
「そうだったんだ」
「とても食べられなかったんだよ」
また言う。
「ステーキなんて。食べるものさえ困っていた時もあったし」
「食べるものも」
「そうだよ。大変だったんだよ」
そう話していく。しかしそれは準一郎にとってはどうしてもわからない話だった。その時代に生きていないからだ。仕方のないことであった。
「とてもね」
「それでお肉が好きなんだ」
「そうだよ。今は幾らでも食べられるけれどね」
また言っていく。
「そうじゃなかったから。世の中がそれだけ変わったんだよ」
そう言ってだった。
「ここだってね」
「ここって？」
「家も昔よりずっと少なくてね。土手の上のこの道もアスファルトじゃなかったし」
それもなかったというのである。
「色々と変わったんだよ」
「そんなに？」
「そうだよ。それでもね」
ここで周りを見るとであった。今は夕方だ。そしてその周りには。赤とんぼ達がいる。彼等はそのまま二人の周りを舞っている。周吉はそれを見て準一郎に対して話すのだった。
「変わらないものもあるんだよ」
「変わらないものって？」
「そうさ。変わるものもあれば変わらないものもあるんだよ」

目を細めさせての言葉である。
「そういうものもね」
「ねえお爺ちゃん」
準一郎も見上げていた。そうしてその赤とんぼ達を見てだった。
周吉に対して言ってきた。
「奇麗だよね」
「赤とんぼ達がかい？」
「うん、何か飛んでる姿がね」
いいというのである。彼はだ。
「奇麗だよね。数も多いし」
「そうだろう？これは変わらないから」
「赤とんぼは」
「変わらないものもあるんだよ。変わるものもあって」
「それで変わるものは」
「それを食べに行こう」
ステーキをである。それは変わったものだ。
変わったものと変わらないものがある。周吉は準一郎と一緒に歩きながらそのことを噛み締めていた。赤とんぼとステーキ、その二つのものをである。

赤とんぼとステーキ　完

２００９・１２・２１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1703l/

赤とんぼとステーキ

2010年10月8日15時22分発行